



写真-1 国道 250 号・汐見橋から上流方向を撮影（令和 6 年 6 月）

■ 国道 250 号・汐見橋から上流を望む

写真-1 は、国道 250 号・汐見橋から夢前川および山陽電鉄網干線の夢前川橋梁（手前にふれあい橋があるので、夢前川橋梁は少ししか写っていない）を撮ったものです。

この橋梁は、飾磨駅～夢前川駅間が昭和 15（1940）年 10 月 15 日開業するのに合わせて、恐らくその前年に完成した単線・下路式ゲルバー鋼桁橋ですが、当時、広（ひろ）土地区画整理事業により行われていた夢前川付替工事の法線に合わせて施工されています。

この点について『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』に以下のような記述があります。

「夢前川の改修は、昭和 13 年 12 月に兵庫県施工の広土地区画整理事業によって、河口から上流 2.5km までの間が実施されており、これが最初の改修である。この改修は、日本製鉄（現・日本製鉄）広畑製鉄所の建設に伴い夢前川を東側に付け替える工事であった。（昭和 13 年 12 月 22 日起工、昭和 14 年 12 月 11 日完成）」

ただ、この記述には違和感を覚えます。国策会社とはいえその工場建設に伴い河川を付け替えることについてはそれなりの背景があったはず。今回は、工場敷地造成の背景や事業の手法などについてまとめてみようと思います。



写真-2 山陽電鉄網干線・夢前川橋梁（右はふれあい橋）



写真-3 国道 250 号・汐見橋

■ 戦時体制下、日本製鐵広畑製鐵所を核とした新興工業都市建設を急ぐ

昭和 6（1931）年の満州事変をきっかけにわが国は戦時体制下に置かれます。そして、旧都市計画法（大正 8 年 4 月 5 日法律第 36 号）において、防空、つまり航空機などによる空中からの攻撃を防ぐことが都市計画の目的の一つであることを踏まえ、1930 年代後半にかけて工業の地方分散が起こり、軍需工場および軍施設が地方に多数建設されました。

こうした軍関連施設を中心として、防空的配慮と地方発展、そして国家的重要政策の円滑な遂行のため、新興工業都市^{※1} がすべて公共団体施行の強制的区画整理によって全国に 23 ヶ所建設されました。そのうちの 하나가飾磨郡（現・姫路市）の「広土地区画整理事業」で、23 ヶ所中最初に実現しています。そして、ここでいう軍需工場が、兵器製造に欠かせない鉄をつくる日本製鐵^{※2} 広畑製鐵所^{※3} です。

公共団体施行の土地区画整理事業は、旧都市計画法第 13 条（工業団地造成事業）に定められたもので、都市計画として内閣の認可を受けた後 1 年以内にその事業に着手するものがない場合、公共団体が都市計画事業としてこれを実施するという規定になっています。つまり、土地所有者が区画整理に消極的であっても、短期間で強制的に土地区画整理を進めることを可能とする手法です。

『姫路市史』によると、工場誘致は戦時体制下の国策として秘密裏に兵庫県を通して進められたそうです。工場の候補地には、飾磨郡広村（廣村）のほか、尼崎・堺・南紀白浜・大塩村などが挙がっていましたが、以下の理由で広村が選定されています。

- ① 大家新田 30 万坪（大家七兵衛の所有地）があったこと。
- ② 遠浅のゆえに地上げ築港に好都合であり、短期間で建設が可能であること。
- ③ 内海に面して軍事的にも重要な位置にあること。
- ④ 製品消費地の大阪と石炭産地の九州筑豊の中間にあること。

県は、広畑製鐵所の従業員を約 1 万 5 千人と想定して、10 万人の在住者と 650 万坪の居住空間が早急に必要であるとしています。昭和 12（1937）年 11 月に、まず揖保郡大津村・勝原村・太田村・八幡村・広村などの約 375 万坪を広都市計画区域に指定し、同年 12 月 1 日、広都市計画区画整理事業は都市計画決定されました。そして昭和 13（1938）年 7 月、施行規定が知事認可を受けます。

都市計画の中核である区画整理は県が主導していますが、これは日本製鐵が単独で土地買収を行えば地価の高騰を招き計画の実現に支障が出ることを避けるためだったそうです。

現に関係地域には土地ブローカーが「各地から雲集する状況が現れ、参謀本部作成の地図は書店から羽が生えたように消え去った」とか。



写真-4 夢前川の対岸に見えるのが日本製鐵広畑製鐵所

街路と排水工事、夢前川付帯工事（付替工事）は別事業として都市計画決定し、その後、昭和 13（1938）年 11 月に広都市計画区画整理事業に編入しています。昭和 15（1940）年 2 月、広都市計画整理事業の設計書が認可されます。

広畑製鐵所の当初の生産開始予定は昭和 16（1941）年とされていましたが、日中戦争の拡大とともに早期の稼働が強く求められていたことから工事は急ピッチで進められます。昭和 14（1939）年に第 1 高炉の火入れが行われ、操業を開始しています。なお、銑鋼一貫生産体制が完成したのは昭和 17（1942）年 11 月です。

※1 新興工業都市：国防上の目的から工業の地方分散を進めるため、軍施設や軍需工場の周辺地域を大規模に開発整備するもので、将来の都市化に先立ち、従来の都市の弊害、無統制な発展などの過ちを再び繰り返さないように、秩序のある統制の下に合理的発展を図るため計画された都市である。昭和 15（1940）年度から地方公共団体施行の土地区画整理への高率の国庫補助が制度化された。

※2 日本製鐵：官営八幡製鐵所を中心とする官営・民営の製鐵事業者が合同し昭和 9（1934）年に設立。昭和 8（1933）年に制定された法律「日本製鐵株式会社法」でその経営が規定された半官半民の国策会社である。経済的・軍事的な面から重要視された鉄鋼を低廉かつ豊富に供給するという使命の元に設立され、日中戦争や太平洋戦争を背景として拡大を続けた。戦後の昭和 25（1950）年 4 月に財閥解体を目的とする過度経済力集中排除法の適用を受け 4 社に分割された。そのうち鉄鋼メーカーは八幡製鐵・富士製鐵の 2 社。この 2 社が昭和 45（1970）年に合併し新日本製鐵となった。そして平成 24（2012）年に住友金属工業と合併し新日鐵住金が発足。平成 31（2019）年に現在の「日本製鐵（にっぽんせいてつ）」に社名変更している。

※3 広畑製鐵所：姫路市南部、夢前川の河口に隣接し姫路港（広畑港）に面する場所に立地し、昭和 17（1942）年に日本製鐵によって鉄鋼一貫製鐵所として建設された。戦後賠償に充てられる予定となったため昭和 21（1946）年に操業を休止するが、解体はなされず 4 年後の昭和 25（1950）年に操業を再開した。再開直後に日本製鐵が解体され広畑製鐵所は富士製鐵が継承、その後は同社の主力製鐵所として発展する。昭和 45（1970）年に八幡製鐵・富士製鐵の合併により新日本製鐵が発足すると、同社の広畑製鐵所となる。平成 5（1993）年に高炉を休止し、鉄鋼一貫体制を廃止した。現在の広畑製鐵所は、面積約 641 万 m²、従業員数は 1,303 人（2019 年 3 月 31 日時点）。

■ 製鐵所建設に伴い夢前川および汐入川を付け替える

図- 1 は、大日本帝国陸地測量部が明治 36（1903）年に測図したのですが、当時夢前川は広畑の町の東を南流していて、河口付近は広々とした三角州が形成されていました。

夢前川の左支川である水尾川も、当時は播磨灘に注ぐ単独水系でした。そして、夢前川河口の両岸には水田が広がっていました。

広畑製鐵所の工場敷地は、夢前川と汐入川に挟まれた土地を造成することになりますが、工場施設のレイアウトの関係からか東西方向に一定の長さを確保するため、夢前川は東に、汐入川は西に付け替えられることになりました。このとき、水尾川は付け替え後の夢前川に合流するように流路が変更されています。

工場敷地の造成は、施工主体が日本製鐵、請負業者が水野組（現・五洋建設）で、昭和 14（1939）年 2 月に工事着手し、昭和 15（1940）年 3 月に竣工しています。



図-1 夢前川付け替え前の地図

■ いにしえの夢前川河口

かつて、夢前川と水尾川に挟まれた河口近くに英賀（あが）城がありました。この城は、室町時代初期の永享年間（1429～1441 年）に赤松祐尚（すけひさ）が築いたと伝えられていて、南は海、西は夢前川、東は水尾川に面し、北は湿地帯で守るのに大変都合のよい水城でした。

嘉吉の乱（1441 年）によって赤松家が勢力を失った後、姻族であった三木通近（英賀三木氏初代）が在城し代々力をつけて城を拡張します。その後、赤松政則が長祿 2（1458）年に赤松家の再興を果たすと、三木通安（英賀三木氏五代目）は、その政則に従って活躍、英賀は瀬戸内の海路と山陽道を結ぶ交易都市として発展します。

その後一向宗と結びつき、明應年中（1492～1501 年）に本願寺蓮如の命を受けた弟子の空善が、英賀に本徳寺を開きます。永正 12（1515）年には蓮如の孫・実玄を迎えて、播磨浄土真宗の中心として、英賀御坊を城域の西詰に建立するまでになりました。

しかし、織田信長と大坂本願寺（石山本願寺）が衝突する中、英賀城主・三木通秋（英賀三木氏九代目）は、播磨の門徒を結集して大坂本願寺を支援し、織田に対抗する毛利氏も水軍を率いてこの英賀湊を援兵と物資の補給に利用しました。



写真-5 「英賀本徳寺趾」碑

しかし、天正 5 (1577) 年、羽柴秀吉軍が播磨に侵攻し、天正 8 (1580) 年 1 月に三木城が陥落したあと、同年 3 月には英賀城も落城しました。

落城後、秀吉は英賀の町民を姫路山下へ移し、本徳寺も天正 10 (1582) 年亀山に移築して、都市としての英賀は消滅しました。

本徳寺跡には、昭和 3 (1928) 年に英賀村青年団が「英賀本徳寺趾」と刻んだ石碑(写真-5)を建てています。この石碑は、昭和 13 (1938) 年の夢前川の付替工事により明蓮寺(写真-6)境内に移され、その経緯を記した副碑も英賀保史跡保存会の手で建てられています。



写真-6 明蓮寺

■ 山陽電鉄網干線の敷設と夢前川橋梁の架設

山陽電気鉄道は、飾磨以西地域の工業化に伴い職工数が 1 万人に達したこともあって、昭和 11 (1936) 年 6 月に飾磨～赤穂郡那波間の鉄道敷設免許を鉄道省に申請します。そして、昭和 12 (1937) 年 3 月に日本製鐵の飾磨郡広村進出が決まったことを受けて、改めて免許促進の陳情を行います。鉄道省からは、同年 5 月に鉄道敷設許可が下りますが、「飾磨～網干間に限り」の許可でした。

その後も線路の位置や工法などで県との折衝が難航したため、鉄道省からの工事着工許可が下りたのは昭和 14 (1939) 年 7 月でした。

飾磨駅～夢前川駅間が開業したのは昭和 15 (1940) 年 10 月 15 日ですが、夢前川橋梁の架設はいつだったのでしょうか。

恐らく流れを切り替える前の新河道にドライな状態で橋を架けたはずなので、着工許可が下りた昭和 14 (1939) 年 7 月～同年 12 月(P.1 の夢前川改修事業の完成)の間に架橋し、その後、流路を切り替えてドライな状態になった旧河道に線路を敷設し、開業を迎えたものと思われます。



図-2 日本製鉄広畑製鉄所周辺の地図

■ モノローグ

広村は、当時姫路市ではなく飾磨郡に属する村でしたが、地元も知らないうちに製鉄工場の誘致が決まったら、普通は激おこぶんぶん丸です。ところが、『姫路市史』によると、当時の村長をはじめ村民は、氏神天満宮に奉告祭を行い「日鉄大溶鉱炉来る」の歓喜の声をあげたそうです。戦時体制下ならではの話です。

キバナノコギリソウ（黄花鋸草）

キク科ノコギリソウ属の多年草。中央アジアから南西アジア原産で、明治時代に園芸用に導入されたもので、日本のノコギリソウとは全く異質な印象の花である。「セイヨウノコギリソウ」と比べても遥かに大型で密な花序で、10～15cmもあるが、個々の花は意外と小さく3～5mmくらいである。葉はノコギリソウらしく深裂するが大型で、そこまで細かく細裂していない。畑や住宅地、公園まわりなどに野生化している場合もあるようだ。明蓮寺近くの民家の前に咲いていた（写真-7）。



写真-7 キバナノコギリソウ

【参考資料】

- 1 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課編 平成 3 年 3 月
- 2 『姫路市史第五巻下・本編近現代 2』 姫路市史編集専門委員会編 平成 14 年 9 月
- 3 『静岡大学経済研究 3 巻 4 号～戦時期日本の工場用地造成と都市計画・国土計画：土地商品の統制とその実態』 沼尻晃伸
- 4 『戦時体制下の新興工業都市建設事業について―広、相模原を事例として―』 中島将弘 秋本福雄
<http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00061/2005/32-04-0087.pdf>
- 5 『播磨 英賀城跡』 「郷土の歴史と古城巡り」ブログ 令和 2 年 3 月
<https://blog.goo.ne.jp/takenet5177/e/4666ec7855134632def4c4f2e27cf896>
- 6 『山陽電気鉄道網干線、新興工業都市、広村、日本製鐵、日本製鐵瀬戸内製鉄所』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 7 『キバナノコギリソウ』 山川草木図譜 令和 5 年 6 月
<https://neko-net.com/hana/archives/27611>

※発行：令和 6（2011）年 9 月 『ひょうご水百景』 No.205

改訂：令和 8（2026）年 5 月 『ひょうご水百景』 No.205